

「出題の意図」

選抜区分	2020年度（選抜区分：推薦入試） 法学部（科目名：小論文）
出題の意図 (評価のポイント)	<p>1 出題の意図</p> <p>(1) 課題文選択の背景</p> <p>出典は、水島治郎『ポピュリズムとは何か—民主主義の敵か、改革の希望か』（中央公論新社、2016年）である。本書は、近年、世界的に問題視される政治のポピュリズム化について、民主主義の危機との観点から考察したものである。本問では、ポピュリズムの多面的な意味を説明した上で、それが民主主義に良くも悪くも機能しようと問題提起する箇所を取り上げた。</p> <p>課題文で筆者はまず、近年、世界的にポピュリズムと呼ばれる政治現象が広がっていることを指摘した上で、こうした状況をどのように捉えるべきかについて問題の所在を示す。一般的には（マスメディアなどを通じて）ポピュリズム＝民主主義の敵といった印象が広まっているが、ポピュリズムの歴史をひもとけば、こうした一般的な見方とは真逆の側面も指摘される。すなわち、ポピュリズムとは人民の声を政治に直接に反映しようとする運動であり、そのプロセスや考え方は、（一般的な印象とは異なり）むしろ極めて民主主義的である。そこで、既存のポピュリズムの定義を整理した上で、現実のポピュリズムを捉える上では「政治変革を目指す勢力が、既存の権力構造やエリート層（および社会の支配的な価値観）を批判し、『人民』に訴えてその主張の実現を目指す運動」として捉えることが妥当であると指摘し、この定義にもとづいて、ポピュリズム政治家（政党）の政治的特徴を4つ述べる。</p> <p>こうした議論を踏まえて、民主主義との関係に踏み込んでいく。つまり、ポピュリズム＝反民主的な象徴として捉える見方と、腐敗したエリートを一掃して人民の声を政治に届ける民主主義を深化させる手段とする見方の妥当性である。</p> <p>米国のトランプ政権や英国の Brexit などポピュリズムが世界を席卷する中、ポピュリズムに関する適切な定義を理解した上で、タイトルにもある「ポピュリズムは民主主義の敵か味方か」に関して、自分の意見を展開できるかを問うことが出題のねらいである。</p> <p>(2) 受験生に何を望むか</p> <p>受験生には、まず、ポピュリズムの定義の多義性を理解したうえで、筆者がより適切と考えるポピュリズムの定義を選択し、その特徴を捉えて適切にまとめる能力が求められる。</p> <p>次に、「ポピュリズムは民主主義の敵である」という考えについて、賛否を明らかにしたうえで、その理由について、民主主義とポピュリズムの関係を踏まえながら、自分の言葉で、論理的・説得的に論述する能力が求められる。</p>